

輝く農心

— Maebashi Farmer's Story —



前橋市担い手育成総合支援協議会
2022年3月

豊かな農地は、豊かな農産物を生み

豊かな食は、豊かな人を育む

表題の『輝く農』は、農地に見立てた色々な図形で構成しています。農地には、形の良い農地もあれば、小さくいびつな農地もあります。

しかし、どの農地も人が手を介さないと荒廃し、その役目を果たせなくなります。

”人と農地の共存” 簡単なようで、とても難しい時代になりました。

日々、農業に奮闘するたくさんの『ひと「人」』により、地域農業は支えられています。

日本百名山の一つ赤城山の南麓に広がる前橋市は、群馬県を代表する農業都市です。日照時間が長く、多品目の農産物が豊富に収穫できる恵まれた自然環境にあります。

本書では、農業で活躍する生産者が就農したきっかけや、経営方針、農業の魅力などを、様々な視点で語ります。



農業で活躍する生産者のみなさん

- 🍷01 森村志保さん 荒砥地区 水稻、露地・施設野菜(ミニトマト等)
- 🍷02 彩園なかや 大胡地区 露地野菜(ネギ・ズッキーニ等)
- 🍷03 STRAWBERRY KUWABARA 上川渕地区 施設野菜(イチゴ)
- 🍷04 木村学さん 粕川地区 露地野菜(ナス・ネギ)
- 🍷05 大崎聡さん 宮城地区 肉用牛肥育
- 🍷06 深田満紀仁さん 富士見地区 水稻、露地野菜(ブロッコリー等)
- 🍷07 (有)はなぶさ有機農園 芳賀地区 観光農園(ブルーベリー・栗等)
- 🍷08 松井ファーム 上川渕地区 施設野菜(イチゴ)
- 🍷09 堀越園芸 荒砥地区 施設野菜(キュウリ)
- 🍷10 (株)赤城深山ファーム 渋川市赤城町 露地野菜(ソバ)
- 🍷活動紹介 グリーン21 粕川地区



森村 志保 さん

大学

就農

経営継承

荒砥地区

水稲、露地・施設野菜

2019年3月に埼玉工業大学を卒業後、新規就農しました。2022年1月に父(勝志さん)から農業の経営を継承し、現在は、水稲95アール、ハウスでミニトマト25アール、露地野菜20アールを栽培しています。

きっかけ

私が就農したきっかけは、祖父の高齢化でした。家業が農家だったこともあり、物心ついたときから農業はととても身近な存在で、幼いころは田植機と一緒に乗せてもらうことが、年に一度の楽しみでした。それが今でも私の心に残る農業の風景であり、良い思い出となっています。

大学2年の頃、本格的に農業を継ごうと思い始めました。しかし、大学卒業後3年ほどは企業で社会経験を積み家業を継ぎたいと考えていたので、農業にも活かせるような技術系の企業に内定を決めていました。それと同じ頃、実家では祖父の高齢化に伴い、肉体的負担を軽減しようと作業工程の多いミニトマトからハウレンソウに経営作目を変更することを家族で話し合っていました。話し合いを進めていく中で、「祖父の持つ技術が失われてしまう。」と強い危機感を抱くようになり、企業に勤める時間が惜しくなって卒業後すぐに就農することを決めました。

やりがい

農業を始めて3年目になりましたが、いまだに自分が納得する栽培ができないことに苦労しています。ミニトマトの定植は、昔はお盆ごろに行っていましたが、今はお盆だと気温が高すぎるので、ひと月遅らせるのが主流となっています。自然環境も農業技術も、日々変化しているので、その変化に合わせて栽培を考えていかなければいけないところが、農業の難しいところだと痛感しています。

出荷は自営の直売所以外にも、JA前橋ゆうあい館やネット販売を行っていますが、定期的に野菜を購入してくれる方や、直売所に足を運んでくれる方がおり、大変嬉しく励みになっています。苦労することも多いけれど、自分の作った野菜にお客様がくださる時は、農業をやっている良かったと思う瞬間です。

多様な視点

2021年に中部農業事務所が主催する『女性農業者スキルアップ講座』に参加しました。講座では、農村生活アドバイザーの講話や、参加者のみなさんとの意見交換をしました。

その中で、営農課題についての解決策を学ぶモデル農家として、我が家の経営を扱っていただくことになりました。

現状を書き出し、解決するための意見をグループに分かれて出しました。我が家の農業経営をどうしたらよくなるだろう、と自分なりに考えていましたが、私では思いつかなかった意見や発想を得ることができました。目指す目標や、課題解決の方法などを明確にするとともに、視野を広げ、多様な視点から客観的に分析することの大切さを学ぶことができ、とても有意義な経験ができました。



経営主として

2022年に父から農業の経営を継承し、晴れて経営主となりました。父も今の私と同じくらいの歳で祖父から経営を継承したそうです。

今後は、私が経営の舵を取ります。不安もありますが、チャレンジしたいことも沢山あり、とてもワクワクしています。新しいことに積極的にチャレンジして、祖父と父から受け継いだ農業を守り発展できるよう、気を引き締めて頑張っていきます。



目指す先

まずは自分が納得いくようなミニトマトの栽培を目指したいと思います。珍しい野菜も少しずつ増やして、自営する直売所やネット販売で完売させることが目標です。

また、今まで栽培していなかった作目にも挑戦したいと思っています。ミニトマトの収穫は6月までなので、次の定植までの約2か月はどうしても手が空いてしまいます。そこで露地ナスを組み合わせて、農閑期ができる限りできないようにしようと考えています。これから栽培技術を勉強し、2023年から本格的に栽培を予定しています。

現在、農業では6次産業化でさらなる価値を創出しようという動きが活発です。ミニトマトはそのままでも甘くとても美味しいですが、それをジャムに加工して販売できればと考えています。作ったジャムを使ってクッキーやサンドイッチなど、様々な商品展開をすることで、皆さんにミニトマトのさらなる魅力をお届けします。





代表 中屋 智博 さん

農業法人

愛知県から転入

就農

なかや ともひろ
中屋 智博 さん

大胡地区

露地野菜

2021年に結婚を機に愛知県から前橋市へ転入し、大胡地区で新規就農しました。現在1.4ヘクタールの農地で露地野菜(根深ネギ・ズッキーニ等)を栽培をしています。

農業で生きていく



私は、神奈川でハードエンジニアの父と専業主婦の母の間に生まれ、住宅地の真ん中で育ち、農業とは無縁の生活を送っていました。そんな私が農業に興味を持ったきっかけは、高校時代に見たテレビ番組でした。その番組は食糧危機に関する内容で、単純だった私は「これは自分でどうにかするしかない。砂漠で農業をやれば万事解決じゃん。」と思い農業の道を目指し始めました。

東京農業大学国際農業開発学科に進学した私は、砂漠で農業をすべく学業に励みましたが、学びを進めていくうちに、食糧問題は食物の生産量によるものではないということを知り、志の方向転換を余儀なくされました。

そんな中で私は、自分の人生を変えるきっかけになったかもしれない出会いを果たします。それは、カンボジアに植林ボランティアに行った時に会った『物乞いの少女』でした。その少女は市場で食事をする私の傍に寄ってきて何も言わずに両手を差し出し、私の横に立っているのです。小学校低学年ほどの見た目、背中には小さな男の子を背負っていました。

当時の私はどうしていいのかわからず無視をしてしまいました。今となっては、なぜ物乞いをしていたのか、学校にはなぜ行かないのか、両親はどうしたのか、それを知る術はありません。ただ、確実なことは教科書で読んだ『貧困が今日の前にある』ということでした。

その日を境に、私は『砂漠で農業』という考え方から、『農業という手段を使って、世界中の貧困で困っている人を助ける』という考え方に大きく舵を切ることになります。

そのような大学生生活を送った私は、何をしてもまず農業ができなければ話にならないという理由で卒業後、茨城県の農業生産法人に就職します。そこで私は十数名を指揮する立場となり、農場立ち上げの経験を積み重ね、農業とは何か、仕事とは何か、ビジネスとは何か、と多くのことを学びました。そうして7年が経過し、2021年に結婚を機に前橋へ転入し、『彩園なかや』として独立営農し、農業で生きていくことを決めました。



安定生産へのこだわり

野菜はいつでもあるかのように思えますが、そうではありません。旬の時期は良品が安価で買えますが、旬ではない時期は低品質の野菜を高値で買うしかありません。

『彩園なかや』では、この不安定をデータサイエンスの力を借りて解決していくことを第1のこだわりとして、独自開発の統計学を取り入れた栽培予測システム『A-stat』を活用し、野菜の生産に取り組んでいます。

具体的には、過去の気象データをもとに定植日を起点とした栽培日数の予測と、数値化した災害リスクを秀品率に反映させた歩留まり予測の2点を、つなぎ合わせた予測システムです。簡単に言えば歴史(気象データ)から学び、今後起こりうる可能性を考慮するシステムです。

農業第4世代

私たちは、2000年以上ある農業の歴史を紡ぎ、先達から受け継いできた農業を発展させてきました。

農業第1世代は、種をまき始めた人々です。

農業第2世代は、農薬、化学肥料を使い始めた人々です。

農業第3世代は、機械化、土地の集約化で効率化を図った人々です。

私たち農業第4世代は、効率化させた農業を発展させるため合理化を図ります。

先人が築いた礎にデータサイエンスを活用し、合理化を上乗せする、そんな考えのもと私の挑戦は始まったばかりです。

農場理念

【MISSION】

『畑を拓き、人を育てる』

【VISION】

『先人の知恵に新たな視点を加え、常識を深化する』

『50年先を見据えた農地の開拓を実行する』

【VALUES】

『野菜栽培に数式を取り入れる』

『土地の集約化を実行する』

『荒廃した農地を畑に戻す』

『数字で理想を語り、数字で今を理解する人材を育成する』

美味しさへのこだわり

本当に美味しい野菜とは何か、それは野菜が持つ本来の美味しさが引き出された野菜のことだと考えています。

野菜は、光合成をすることでその美味しさを体内に蓄えていく仕組みになっています。私たちは、植物の中で光合成の仕組みが最大限に稼働できるような手助けを、サイエンスの視点から土づくりや肥料、農薬を介し行っていくことで、野菜本来の美味しさを追求していきます。





代表 桑原 佑樹 さん

会社員

農家研修

就農

くわばら ゆうき
桑原 佑樹 さん

上川淵地区

施設野菜

2019年4月に新規就農し、妻(ポーリンさん)と二人三脚で、作付面積23アールのハウスでイチゴ栽培をしています。

きっかけ

東京農業大学在学中に、国際的なフードビジネスの経営を学ぶため、フィリピンへ短期留学しました。フィリピンではオーガニック野菜の栽培などを学び、収穫して直ぐに食べた野菜の味に感動したことが、農業を考えるきっかけになりました。

大学卒業後、東京で食品メーカーに就職しました。新鮮野菜を瞬間冷凍した野菜惣菜を作る会社が、順調に売上げを伸ばす状況を目のあたりにして、「自分も農業で稼げるのではないか。」と思いました。この会社には、社員のチャレンジ精神や、やる気をうまく引き出し育成してくれる風土がありました。営業や人事を担当したここでの2年間で、現在の農業経営に大きく影響していると思います。

農業の決意

農業での起業を決心し、会社を辞めて群馬に戻り、はじめは知り合いの農家を手伝いながら自分にあった作目を考えていました。「自分で作った農作物をお客様の顔が見える形で販売したい。」という思いがあり、子供から大人まで、どの年齢層にも好まれるイチゴ栽培を決断しました。

イチゴ栽培を始めるにあたり、多額の資金が必要になることから、当時家族からは「何を考えている。」と反対されました。しかし、農業は儲からないとよく言われますが、自分にはまだまだ可能性がある、という強い思いがあり決断しました。ご縁があり、松井ファーム(本誌08で紹介)で1年間の研修を受けることができ、2019年の起業に至りました。



感謝の気持

イチゴ栽培の知識が全く無かったため、研修先の松井ファームの松井利彦さんには、育苗から防除、栽培管理、販売に至るまで、多くの技術を細かく指導していただきました。

今でも様々な相談にのってもらい、心から感謝しています。

活力の源

下佐鳥町にある直売所に足を運んでくださるお客様から、直接「美味しい。」と喜びの声をいただきます。わざわざ県外から毎週のように直売所に足を運んでくださるお客様も増えました。

非農家出身のため、大変なことが沢山ありますが、お客様の声が現在の活力になっています。

また、就農時に自分の夢と一緒に応援し、支えてくれる妻と結婚できたことも大きな原動力です。

これから

昨年(2021年)から、取引先のスーパー等も増えて、たくさんの周囲の人に支えられていると実感しています。

おかげさまで、『群馬県いちご品評会』では就農してから3年連続で賞を頂き、今年(2022年)は2度目となる群馬県知事賞(金賞)を受賞することができました。

応援して下さる方々への感謝の気持ちを忘れずに、規模拡大や6次産業化にも着手できるように、これからも妻と2人で頑張っていきます。

イチゴ栽培

イチゴ栽培は作り手によって味が違うところが、面白いところです。

イチゴの最盛期は、夜明け前から収穫が始まり、約半年間はその状態が続くので体力的にも大変ですが、高校野球で培った体力には自信があります。



ポーリンさん(妻)



木村 学さん

建設業

就農

粕川地区

露地野菜

2015年4月に新規就農し、露地ナス20アール、秋冬ネギ40アールを作付けしています。

きっかけ

農業を始める以前は建設業でしたが、34歳で農業の魅力に気づき、就農しました。妻の実家が農家で、農繁期に手伝うことはありましたが、農業の知識が全く無いうえに、資金や農業機材などの準備もなく起業しました。

1年目の壁

私のような農業の知識も経験も無い素人には、当時農地を貸してくれる人もなかなか見つからず、1年目は妻の実家の農地を借りて、露地ナスとチヂミホウレンソウの栽培を始めました。露地ナスを接木して順調に生育し、これからやっと収入が見込めると思っていた矢先、出荷2日目でひょう被害に合い、ナスの葉が全部落ち全滅に近い状態になってしまいました。たった1日での圃場のあまりの変わりように愕然としました。なんとか養生し僅かに出荷できましたが、1年目は見込んでいた収入には到底届かず、生活にも影響が及んでしまいました。

また、農業での実績が無い農業者は融資を受けることができず、仕方なく私財を売って資金繰りをしましたが、それでも足らず、高い金利の融資を受けざるを得ませんでした。それを元手に、軽トラックなど農業に必要な資材を購入しました。

2年目以降は、失敗を繰り返しながらも農地を増やし、自分に合う作目を模索してきましたが、やっと現在の露地ナスと秋冬ネギにたどり着きました。露地ナスと秋冬ネギの栽培は、高収入に繋がる組み合わせですが、夏の一番暑い時期にナス収穫の最盛期を迎えます。併せて秋冬ネギの除草作業の時期が重なり、多大な労働力が必要となります。体力的にも相当厳しい状態が続きますので、この組み合わせを断念する農業者もいると聞きますが、この2つが自分には合っていると思っています。

妻と協力しながら、また、農繁期には義父が手伝ってくれますので、3人で力を合わせて頑張っています。



折れない心

露地野菜は自然が相手ですので、丹精込めて作った作物が風雨により壊滅的な状態になることもあります。

その時は、心が折れそうになりますが、自然を恨んでいてもしかたがないので、気持ちを切り替えて前に進みます。



確かな手ごたえ

農作物は根気強く手間をかければ、かけたなりに応えてくれるのでやりがいがあります。

今では、声をかけてくれる仲間も増え、機械を貸してくれたり、気軽に相談にのってくれる環境があるので心強いです。

就農6年目

就農6年目(2021年)でやっと「良いものを育てればお金になる。」と実感できる余裕ができました。脱サラして、農業を選択して良かったと思っています。

これから

天候を先読みして、計画的に作物管理をすることや、自分がどれだけ良い作物を作れるかなど、まだまだ試行錯誤の毎日ですが、今は農業を楽しんでいます。

今年(2022年)は、ナスとネギをそれぞれ20アールほど規模拡大するとともに、ブロッコリー40アール、ズッキーニ10アールの新たな作付けに挑戦したいと考えています。

今後も規模拡大を図れるよう頑張っていきます。





大崎 聡 さん

農業大学

就農

経営継承

宮城地区

肉用牛肥育

東京農業大学を卒業後、2011年に新規就農し、肉用牛約100頭を肥育しています。令和3年度、群馬県から青年農業士の認定を受けました。

青年農業士とは？

- ・農業青年活動への積極的な参加と助言
- ・自らの経営発展のための研究と実践
- ・地域農業振興等社会活動への参画

これらの活動を通じ、農業の発展と魅力ある農村社会の構築に取り組んでいます。

経営継承

私はもともと動物が好きで、大学在学中は北海道網走市でエミューの研究をしていました。また、母の実家が肉用牛を肥育していたため、幼い頃から牛と接していました。大学卒業を控えた頃、叔父から家業を継がないかと打診され、農業以外に魅力を感じる職業が無かったので、叔父の話を受け大学卒業と同時に新規就農しました。

当時、私の母も実家の農業が叔父の代で終わってしまうことを心配していたため、私が叔父の家を継ぐことになり、とても安堵していました。2014年に叔父と養子縁組をして農業経営を継承しました。現在は、叔父に教わりながら約100頭の肉用牛を肥育しています。私が農業することを妻や子供達も応援してくれています。

現在は交雑牛が主ですが、いずれ自分の手で和牛も育てたいと思っています。良質で美味しい肉牛を育てられるよう、これからも技術の向上を図り頑張っていきます。

やりがい

肥育する牛は、前橋家畜市場で生後60日以内の子牛を買っています。市場には、酪農家から出荷された良い子牛が集まるため、鹿児島や北海道など全国の農家が買い付けに来ています。一般的に市場では、オスの方が人気で高値で販売されています。

牛は、餌の配合や量、餌やりの方法で肉質が変わってきます。小さな子牛を上手に大きく育てられた時や、良い肉牛を育てあげられた時の喜びはとても大きいです。また、風邪をひいた牛を治療して完治した時などは、本当に嬉しくやりがいを感じられます。



宮城地区

宮城地区は、前橋市内でも畜産が盛んな地域です。私は肥育農家の経験は浅い方なので、先輩農家の方に色々と教えて頂くことも多いのですが、どんな相談でも適切なアドバイスをしてくれます。

この地域は、みんな優しく良い人ばかりなので大変助けられています。農家はひとりではやっていけないので、支え合い、繋がりを持つことが重要だと考えています。

また、自分でも何か地域貢献したいと思い、地元の消防団に属しています。農村地域を取り巻く環境は、農業者の高齢化や農家離れなどで年々厳しい状況ですが、様々な活動を通じて地域の人と交流していく中で、地域を守っていく共助の大切さを痛感しています。



酪農クラブ

前橋地区内の農業青年の親睦や連携を深めることを目的として、農業青年クラブ連絡協議会があります。私は、その中の酪農クラブに8年ほど在籍しており、現在10名ほどの若い農業者が交流を通して知識や技術の習得を図っています。



命の恵に感謝

畜産農家は伝染病を出さないよう、日々細心の注意を払い養畜しています。農業者の減少や地球温暖化等の影響により、現在はあたりまえのように口にしている食べ物が、食べられなくなる時代がやってくるとも言われています。

私たちは消費者が安心して口にできる美味しい食肉を届けるため、今ある命の恵に感謝し、これからも努力していきます。

年末年始には、生乳の増産基調やコロナ禍の消費低迷の影響により、生乳の廃棄が懸念される騒ぎとなりました。生乳に限らず牛肉が供給できるのも、酪農家あつての肥育農家です。

皆さん！カルシウム豊富な乳製品をたくさん食べて丈夫な体をつくりましょう。そして、愛情込めて育てあげた地元上州牛を、ぜひご賞味ください。



深田 満紀仁 さん

会社員

農家研修

就農

富士見地区

水稲、露地野菜

2013年4月に新規就農し、現在は、水稲15アール、ネギ10アール、ズッキーニ20アール、ブロッコリー2.5ヘクタールを栽培しています。

ターン就農

大学卒業後機械メーカーに就職し、農業用テープナー（誘引結束機）の設計開発をしていました。当時、開発商品の検証のため、全国各地の農家さんと深く関わりを持つようになり、それが最初に農業へ興味をもったきっかけです。

機械メーカーに6年ほど勤めたころ、自分の働き方に疑問を抱くようになり、機械メーカーを退職し、IT関係のベンチャー企業に転職しました。そのベンチャー企業での5年間の経験で自分の中の起業マインドが目覚め、何か自分自身の手で新しいことに取組みたい、自分で経営したいと考えるようになりました。学生時代からバイクにテントを積み山へ出かけ、自然の中で過ごすことが好きだったことや、農業が自分の持つライフスタイルに合うことなどから、農業で起業することを決意しました。私は東京都出身のため、新規就農にあたり東京や神奈川で農地を探しましたが、なかなか思いどおりの農地が見つかりませんでした。ご縁があって前橋で農地を見つけることができ、農家研修を経て38歳で新規就農しました。

非農家出身、かつ、ターン就農だったため、就農にあたっては、国の青年就農給付金の支援や、『ぐんまフロントランナー養成塾』への参加など、各行政機関や研修先農家の方々に支援して頂き、心から感謝しています。

これまで自分にあつた経営作目を模索し、失敗や試行錯誤を繰り返しながら、就農時の50アールから現在の2.5ヘクタールまで経営規模を拡大し、現在の経営にたどり着きました。





食農教育

令和3年度にJA前橋市青年部の部長を務めさせて頂き、群馬県内をはじめ全国の若手農業者の方々との交流や、農業が抱える問題や将来について考える貴重な経験をする事ができました。

また、青年部活動の一環として、近隣の幼稚園児にサツマイモ栽培と収穫体験の食農教育の取組みを毎年行っています。園児の笑顔や喜ぶ姿にやりがいを感じるとともに、農業がもたらす力や食の大切さを伝えることの重要性を再認識しています。

人生を楽しむ

就農時に初期投資を抑えた分、これまで大きな痛手はありませんが、経営スタイルの確立には時間がかかってしまいました。今でも経営面では思いどおりにはいかず苦労することも多いのですが、出荷前の野菜を最初に食べる時の喜びは格別で、気持ちが前に進みます。

先人が大切に農地を守ってきたからこそ、今農業を営むことができます。そのことに感謝しながら、『農業で人と繋がり地域の中で暮らしていく』、このポリシーを大切に、今後も農業者としての人生を楽しんでいきます。

米野機械化組合

就農1年目で、地元の機械化組合に加入しました。ここでのオペレーター活動により、先輩農家の方々と接し、農業指導やアドバイスを頂くことができました。農業経験の浅い私にとっては大変ありがたいことで、今でも感謝しています。

現在、機械化組合では約12ヘクタールの作業を受託しています。この辺りは、中山間地で傾斜や狭小農地の多い地域ですが、農業者の高齢化も年々深刻となり、自家消費米を作りなにか田んぼの維持をしている方や、米を作っても収益がほとんど無いため米作を止めてしまう方が増えてきています。

数年後、この状況はますます深刻なものとなってきます。「この先、この田んぼは誰がやれるんだ。」と地域農業の先行きを憂えています。

米野機械化組合では、私が47歳で一番若く、次に若い方は60代です。先行きの不安を感じながらも、この地で農業をすることを選んだ者として守っていかなければならないという気持ちがあります。皆で地域農業の将来を話し合い、考えていく必要があると感じています。





代表 林 伴子 さん

ピアノ講師

就農

経営継承

はやし とも こ さん
林 伴子 さん

芳賀地区

観光農園

2001年に父が開園した観光農園を、2017年に経営継承しました。ブルーベリーとサツマイモは有機栽培(有機農産物JAS認定取得)を行い、また和栗なども栽培し、現在は収穫体験のほかに、生産から加工販売、スイーツカフェを手掛けています。

有機栽培への想い

当園は、2001年に父(故・明秀さん)が開園し、今年で20年目になります。自身が病を患った経験から、父は『食の大切さ』への想いをしだいに強く持つようになり、56歳の時に当時代表を務めていた建設業の世界から、農業の世界に足を踏み入れました。

ポリフェノールを多く含む果実という健康志向の高まりと、赤城南麓が水はけと水もちの良い土地であることからブルーベリーの栽培が適していると考え、手探りで始めました。

化学肥料を使わない有機栽培へのこだわりから、まずは大規模な土壌改良を行いました。栽培には手間と時間を惜しまないことが信条です。剪定のやり方と除草作業を徹底し、お客様が安心して食べられる大粒で甘くておいしいブルーベリー作りに奮闘する日々でした。



観光農園

2006年に本格的に観光農園としてオープンしました。

しかし、ブルーベリーは健康に良い果実という認識はあるものの、リンゴやイチゴのような浸透性は低く、観光農園のみで経営を安定させるのは大変厳しい状態でした。

販路拡大

開園から数年間は、まずは『はなぶさ農園のブルーベリー』を知ってもらうため、市内のスーパーや東京などへの販路拡大やPRを積極的に行いました。

そのような中で、お客様の「大粒で甘くておいしい。」との声が大きな励みとなっています。良いものを作れば、認めて喜んでくれるお客様がいるということが、現在でも大きな原動力となっています。



収穫体験



栗拾い



サツマイモ掘り

父の想いを継いで

2017年4月に父が亡くなるのと同時に、私は農園を経営継承しました。就農前は、子育てとピアノ講師をしていました。それまでは、父を手伝う程度でしたが、父が苦労している姿を間近で見てきたことや、農業について全くの素人だったので、農園を継ぐことについては、大きな不安と戸惑いがありました。

しかし、何よりも安全で安心して食べられること『食の大切さ』への想いや、少しでも多くの方に美味しい体験をしていただきたいとの想いは、父と同じであったので、農園を繋ぐことを決心しました。

新たな挑戦

以前からブルーベリーの6次産業化にも取り組んできましたが、なかなか計画どおりに商品の売上げが伸びず、安定した経営という面では苦戦し、悩む日々でした。

そこで、お客様に採れたての野菜や果実のおいしさを直接味わっていただくことができないかと考え、思い切って2017年4月、赤城南麓の嶺町に手作りお菓子工房『スイーツキッチン』を開店しました。

開店後、無我夢中で頑張ってきましたが、4年目を経てようやく農園と工房がともに軌道に乗ってきたと実感しています。



手作りお菓子工房『スイーツキッチン』



つながる果樹園

私が継いだときは、全部で1ヘクタールほどの農園でしたが、新たに60アールの農地を借り規模拡大を図っています。

規模を拡大するにあたり、農地を新規に貸して下さる農家さんからは「土地を愛してください。」との言葉と、農地への想いを託していただいています。その想いをしっかりと受け止め、大切に繋いでいきます。

以前は、赤城山観光に訪れたお客様が当園に立ち寄ることが多かったのですが、今では県外から当園を目的地として来てくださる方が増えてきています。将来的には、当園に来てくださったお客様が、赤城南麓の観光も楽しんでもらえるような存在感のある観光農園を目指していきたいと考えています。



スイーツキッチンで提供できるメニューを増やすため、今年から枝豆の栽培を始めますが、野菜栽培の経験や知識の浅い私に手を差し伸べてくれる農家さんがいます。父の想いを繋いでいく中で、地域の方々との繋がりを強く感じています。

いつか赤城南麓のこの農園で、音楽会などを開催し、人々が集える憩いの場所とできるよう、大きな夢を描き頑張っていきたいと思います。

就農

経営継承



松井 利彦さん(左) ・ 貴一さん(長男)(右)

まつい としひこ 松井 利彦さん

まつい きいち 松井 貴一さん

(長男)

上川刈地区

施設野菜

1973年に高校卒業とともに18歳で、父(故・松太郎さん)のイチゴ栽培を経営継承し、2014年には長男(貴一さん)が継承し、親子三代にわたり美味しいイチゴ作りを探求しています。

父の背中

《 松井利彦さんの寄稿です。 》

私の父(故・松太郎さん)は、昭和30年代後半からイチゴ栽培を始めました。当時、周囲の農家では米作が中心で、イチゴ栽培をする人はほとんどおらず、いち早くイチゴ栽培に取り組んだ父の探求心と先進性を尊敬するとともに、現在の松井ファームの礎を築いた父にはとても感謝しています。「ハウスなどまだ無い時代に石を積んで段々畑を作り、油紙のようなものでイチゴを被覆し、石の熱を利用して加温していた。」と父から聞かされました。

父の後を受け継いだ後も、イチゴ作りは試行錯誤の毎日でした。

「技術は隠すことがあたりまえ。」で、先輩農家に教えてもらうことができませんでした。

そんな時代にありながら、自分の技術を周囲に全て教えていた父の姿を見て、その懐の広さと大きさに強く憧れていました。



佐鳥町のイチゴ園(昭和39年) 撮影:高野富夫氏・所蔵:前橋市立図書館

仲間を育て、仲間と育つ

そんな父の姿を軸とし、常に最良のイチゴを求める日々を送ってきました。そのうちに「イチゴ栽培について教えて欲しい。」と多くの若者が当園を訪れて来るようになりました。自分の技術を教えて仲間を育てることで本音で語り合える生産者仲間が増え、その後、情報共有や技術を高め合い切磋琢磨していくことが、お客様に喜んでいただける最良のイチゴ作りへと繋がっていくと考えています。

「若い人から学ぶこともある。良いものを見つけるためにも止まるわけにはいかない。」そのような想いで、これまで後進の育成にも力を入れてきました。

今では20人を超える師弟仲間と、毎年、交流会や勉強会を開催しています。このような取組みを続けた結果、県の品評会や共進会では、最高賞となる知事賞をはじめ金賞を受賞することも多くなっていきました。

直売所に来てくれた人全員に「また食べたい。」と思ってもらえるイチゴを作りたい、そんなこだわりを持ち続け、仲間と共に最良のイチゴを作る挑戦は続いています。



イチゴ狩り

当初は、直売所とスーパーなどへの卸売りを主としていました。家族で対応できる経営面積には限界を感じていながらも、どうしたら規模拡大ができるかと模索していました。

そんな時、仲間からイチゴ狩りのノウハウを教えてもらい、2011年にイチゴ狩りを始めました。ハウス内は高設栽培として、車いすの方でも気軽にご利用いただけるようにバリアフリーにしました。現在では、毎年楽しみに訪ねてくれる常連のお客様や、市内外から来訪して下さる多くの方に大変喜んでいただいています。



現在は、69アールのハウスで、13種類のイチゴを栽培しています。

いくつになっても、お客さまからの「今年のイチゴもおいしいねえ。」「さらに甘くなったね。」などの言葉に励まされ、美味しいイチゴ作りへの探求心と情熱が湧いてきます。

つなぐバトン

《 貴一さん(長男)の寄稿です。 》

私は、大学院を経て電子部品関係の企業に就職しましたが、30歳を目前に控え今後の人生を改めて考えた末、家業であるイチゴ農家へ転身しました。常にイチゴと向き合い、職人のような父(利彦さん)の姿を間近で見えてきて、自分も父のようなイチゴを作りたいと思いました。



2014年1月に就農した矢先、翌月2月の豪雪で、農園面積の8割のハウスが倒壊する被害に遭いました。しかし、「祖父から父へと受け継がれたイチゴを守らないともったいない。」という気持ちと使命感により、苦境の中でも再生し存続することに迷いはありませんでした。

農業の奥深さに触れるにつれて、「自分が本当にやりたい仕事はこれだったんだ。」と思えるようになり、充実した日々を過ごしています。



祖父が始めて父が大きくした農園で、自分は何ができるのかを日々考えています。就農して8年目となった今、イチゴ栽培の技術はまだ父には追いつきませんが、イチゴ栽培への情熱は父にも負けないと思っています(笑)。



親子三代にわたるイチゴ農家の歩みに誇りと希望を持ち、これからも家族で協力しあい頑張っていきます。

廃棄ゼロへ

父と共に丹精込めて作ったイチゴを廃棄せず有効活用するため、年々6次産業化にも力を入れ、現在はイチゴの廃棄ゼロを達成することができました。

直売所では、無添加ジャム、大福、濃厚スムージー、クロワッサンサンド、シェイプアイスの5種類のイチゴスイーツを販売し、お客様には大変ご好評をいただいています。

今シーズンは、新たに『和む菓子なか又』さんからオファーを頂き、季節限定商品のコラボレーションにも取り組んでいます。





代表 堀越 徹也 さん

農林大学校

就農

経営継承

ほり こし てつ や
堀越 徹也 さん

荒砥地区

施設野菜

1968年に父(恒弘さん)が施設キュウリ栽培を始め、群馬県立農林大学校卒業後、1993年に就農しました。

現在は、父や弟(直樹さん)と一緒に大型ハウス4棟で1.27ヘクタール、10アールあたり収量33t(県指標22t)、年間生産量400tを生産し、この20年間で経営規模を2.5倍に拡大し営農しています。

周年出荷で安定した雇用

4棟の大型ハウスを2つの作型に分けて利用することで、周年出荷及び周年雇用体制を確立しています。作型の組み合わせは、

- ①10月～1月、3月～7月に収穫する「越冬＋半促成」と、
- ②1月～6月、8月～10月に収穫する「促成＋抑制」の2つの作型に分けています。

それまでは繁忙期になると、従業員に超過勤務を求めざるを得ませんでした。出荷収量を作型の組み合わせにより平準化したことで、栽培・収穫技術を身に付けた従業員を、年間を通じて雇用する条件を整えました。

働きやすい職場づくり

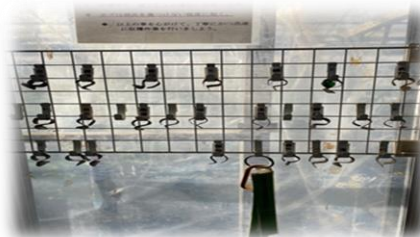
従業員の希望に合わせて、①朝6時から12時まで、②午後2時半から夕方まで、特に子育て中の女性は、③8時半から12時までに勤務時間を限定し、従業員の生活スタイルにあった働き方を選択できるようにしています。日頃から、女性労働力の活用と働きやすい職場づくりを心がけています。

また、従業員の担当をハウス内での収穫作業や栽培管理と、選果や箱詰めなどの出荷調整作業の2つに分けています。これにより、それぞれの仕事の内容が明確になり、従業員のやる気や技術の向上につながっています。

マネジメント手法導入

2010年に、大手半導体メーカーの工場に勤務していた弟が就農し、経営に参画しました。会社勤務で培ったマネジメント手法や、作業のマニュアル手法を取り入れるとともに、小さな無駄を一つずつ改善しました。

作業道具の保管位置を決め、使ったものは元の場所に戻すことを従業員に徹底しました。棚や箱などの保管スペースをたくさん作ることで、従業員も自然と配置を覚えるようになりました。小さな積み重ねが、業務効率化の大きな成果となっています。



作業道具の整理整頓

面積の壁



コンテナを収穫する地点まで運べる
特注台車

一般的にキュウリやトマトといった果菜類の生産は、経営規模を拡大すると栽培管理が行き届かず、生産量が増えて品質が落ちたり、収益性が下がったりする傾向にあります。

しかし、作業習熟度別に栽培担当を指導するとともに、省力的な手法を導入することで、大型でもきめ細かい管理が実現し『面積の壁』を超えることができました。

例えば、主枝を摘み取って側枝の成長を促す摘心作業は、熟練の技術や知識が必要ですが、より省力化を図るため、側枝2節摘心に統一して決められた手順を一人一人に指導しました。

通常は、熟練者でなければ難しい作業が、経験年数の少ない従業員でも自らの判断でできるようになり、これにより作業の効率化が図られ高収量に結びつきました。



ハウス内にレールトロッコ台車を導入し、
一度に大量のコンテナの搬出が可能

作業環境の改善

出荷調整をする作業室(81㎡)も、随所に工夫を凝らしました。作業動線に着目して、1.5tトラックを囲むように作業台を「コ」の字形に配置しました。

これにより、収穫したキュウリを積んだコンテナと出荷箱を並べて箱詰めした後、3方向から直接トラックの荷台に載せられるようになりました。



トラックを囲むように「コ」の字形に作られた作業室

作業室では、

- ①決まった場所にコンテナを置き箱詰めする、
- ②冷暖房設備を整備する、
- ③内装や明るさに配慮する、

これらの取組により、作業負担の軽減を徹底し、働きやすさを追求しました。

作業室内は、空調、調理設備が整い、休憩時には従業員が集まり談笑しています。

また、2020年には、従業員の作業環境向上のため、ハウス脇に匂わないバイオトイレを設置しました。これが、従業員には大変喜ばれています。



ひざが入る掘り込み式の床で作業負担を軽減

機械導入による省力化も進めました。施設管理のための複合環境制御装置や、細霧装置、温水装置などを設置しました。

また、灌水や温度、湿度管理を自動化し、栽培管理の手間を省いたほか、生産促進と収量増加のための炭酸ガス施用を活用し、キュウリの増収を図っています。



ハウス脇に新たに設置した匂わない『バイオトイレ』

家族の団結力

大規模経営のカギとなるのは、なんといっても家族の団結力です。双子の弟の経営参画で、規模拡大と企業的栽培管理を実現することができました。

また、母や妻が従業員として作業場に入ることで女性従業員との意思疎通が図られ、風通しの良い職場となっています。

現在は、弟の妻も出荷調整作業を担当し、両親を含め6人で家族経営協定を結んでいます。役割分担を明確にすることで、休暇も取りやすくなり『ゆとりある生活』に繋がっています。



徹也さん(長男)(左) ・ 恒弘さん(父)(中央) ・ 直樹さん(次男)(右)

『堀越園芸』は、第45回日本農業賞で最高賞となる大賞を受賞し、家族経営としては全国有数の規模を誇っています。

(株) 赤城深山ファーム



社長 高井 眞佐実 さん

そば屋経営

就農

高井 眞佐実 さん

渋川市赤城町 露地野菜

赤城山麓の標高200m～800m、火山灰土が堆積した水はけの良い土地でソバ栽培を行っています。寒暖の差が大きく夏も冷涼、霧のまきやすい土地柄で風味の良いソバが生産できます。

土づくり、機械除草、畦畔管理等を徹底することで、農薬を一切使わない無農薬栽培に取り組み、ソバの生産だけでなく、加工、販売まで手掛けています。

※前橋市で約9ヘクタールの耕作放棄地を解消し、約28ヘクタールの遊休農地を集積。

また、渋川市では約100ヘクタールを農地を集積。

企業理念

『優良な農地を次世代につなぐ』

赤城地域でソバの栽培を初めて15年、その間に25ヘクタールの耕作放棄地を解消してきました。雑草や雑木に覆われた畑を元の姿に戻すことは、簡単ではありません。それでも、豊かな農地を次の世代へ残すことは、私たち世代の責務であると考えます。

赤城深山ファームの「化学肥料・化学農薬に頼らないソバ栽培」は、「良質で安心安全なソバ栽培」だけでなく、「豊かな農地を次の世代へとつなぐ」ための取組でもあるのです。



ソバにかける想い

私は、1970年から1991年まで、都内で蕎麦屋を経営していました。自ら蕎麦屋を営んだ経験から、ソバは小麦とは違い、とても傷みやすいと感じました。梅雨時期などは、時間の経過とともに粉が劣化していくのを感じ、最後まで使いきれずに処分することもありました。そんな経験から「ソバは生もの」と思って取り扱っています。収穫後の殻粒水分、温湿度管理はもとより、袋の上から直射日光も品質に影響を与えると感じ、品質劣化を極力抑える管理の徹底を心がけています。

『技が100%あっても、100%の素材でなければ、100%の蕎麦にはならない』との信念で、ソバ栽培に取り組んでいます。土づくりから製品まで、とことんこだわり抜いた色・味・香りが自慢のソバ粉です。



種まき



除草作業



収穫作業

品質へのこだわり

私たちは、機械化の時代でも品質を保つための労力は惜しみません。

- 1 ソバ本来の色・香りを大切にしたいので、通常よりも早い、黒化率70%前後で収穫しています。
- 2 収穫作業は、昔ながらの袋取りにこだわっています。通気性の良いネット袋を使うことで、穀粒温度の上昇による品質の劣化を防いでいます。
- 3 穀粒温度の上昇による風味の低下を防ぐために、一次乾燥は速やかに行います。
- 4 乾燥は速やかに、でも急激な乾燥は品質低下を招きます。加温と休止を繰り返すことで、品質維持を徹底しています。この工程で、水分の均一化も徹底しています。
- 5 専用の乾燥機による二次乾燥、仕上げ乾燥で、水分15.5%を徹底しています。
- 6 二度の粗選作業、石抜き機・金属除去用選別機による徹底した異物除去を行っています。

作耕作放棄地と高齢者



耕作放棄地【解消前】



耕作放棄地【解消後】

従業員15人のうち、女性7人、アルバイトが5人(うち4人が高齢者)です。農業はどうしても繁散があります。1年間、フルタイムで働かなくてもいい高齢者を雇用することで、繁散に対応しています。耕作放棄地と高齢者はどの地方でも増えています。こうした状況をうまく活用し、事業の拡大に役立てています。また、女性が活躍し、明るく活気あふれる職場となっています。



中山間地での農業は、野生動物との戦いでもあります。鹿の侵入による食害を防ぐための防護柵の設置を、毎年行っています。

6次産業化への取組

1俵あたりの玄そば価格は、2011年までは18,000円でしたが、2013年には8,000円まで低下してしまいました。そこで、就農後9年目となる63歳で法人化し、6次産業化法の認定を受け、1億円を投じてそばの加工用施設を建設しました。狙いは独自販売による付加価値の獲得で、生産性革命を起こすために未来への投資です。

当社では4種類のそば粉を製造し、それを蕎麦屋のオーダーに応じてブレンドして、使い勝手が良く鮮度保持しやすい5kg袋で販売しています。その結果、現在では全国各地の約200店舗と取引し、『加工品売上1億2千万円の実現』を目標に掲げています。

2020年は、コロナの影響による飲食店の閉店や時短要請により、取引量が減少しました。そこで、健康志向の高まりから、そば粉にはエゴマに次ぐ高抗酸化力があることや、グルテンフリーな点に着目して、手軽にそば粉100%のパンケーキが作れる『蕎麦パンケーキミックス』を商品開発し、ネット販売を開始しました。ピンチはチャンスとして捉え、日々奮闘中です。



赤城深山そば粉



【新商品】蕎麦パンケーキミックス

- 2011 全国そば優良生産表彰 農林水産大臣賞
- 2014 フード・アクション・日本アワード 優秀賞
- 2015 全国農業コンクール 農林水産大臣賞



第2代会長 坂本 忠さん
(農業委員)

私達は仲間との繋がりを通じて、農業技術及び所得の向上を目指し、地域農業を発展させるため自発的に活動しています。

本気で農業をやりたい人なら誰でも入会できます。忘新年会や花見会等で親睦を図るとともに、農業技術や所得向上に向けた取組を行っています。

8名ほどで発足しましたが、現在は25名まで増え、新規就農者や公務員やJAの退職者など、20代から70代まで幅広い年齢層の農業者が在籍し、枠にとらわれずに農業を楽しみながら活動を続けています。

きっかけ

旧粕川村は農業の盛んな地域ですが、例外なく農業者の高齢化等により生産者組合の実質的な活動が困難となり、2008年に解散しました。

当時、農業者同士が集荷所などで会っても挨拶や言葉を交わせない人もおり、生産者組合が解散し交流の場が減ったことで、更に人との繋がり希薄化に拍車がかかってしまうことへの危機感を抱きました。

安定した農業経営には、農業への強い意欲と情熱が必要ですが、地域の人との繋がりがとても大切です。仲間との横のつながりを通して、困った時に相談したり、技術指導を受けたりできる環境は、強い農業者を作る一助となり、最終的には私達が住む地域農業の発展に繋がります。

そこで、地元農業の先駆者的存在である樋口敏文(初代会長)さんらと数名で、2009年に若手農業者を中心とした組織『グリーン21』を立ち上げました。



主な活動

コロナ禍で直近2年ほどは活動範囲が狭まっていますが、モロヘイヤ、ネギ、チヂミホウレンソウ、露地ナス栽培などの巡回指導をはじめ、農林大学校や県技術センター、時には市外の農業者を訪ね、技術習得や先進的農業者を視察するなどの活動を行っています。

このような活動を続けて13年ほどになりますが、JA前橋市等が主催する共進会等では、毎年当会員から受賞者が出ています。仲間との繋がりを大切に農業に励むことで、さらに粕川地区の農業が活気あるものになれば良いと考えています。

前橋市担い手育成総合支援協議会

〒371-8601

前橋市大手町二丁目1 2番1号

Tel : 027-898-6733

(前橋市農業委員会事務局)

Mail : noui-jimu@maebashi.gunma.jp